HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語学習者の口頭談話におけるジェスチャーと指示対象の特定
Author(s)	柳町, 智治
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 3, 68-88
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45578
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC003_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第3号　(1999) [研究論文]

日本語学習者の口頭談話における ジェスチャーと指示対象の特定

柳町智治

要　旨

本稿では英語を母語とする初級後半から中級の日本語学習者と母語話者の口頭談話をもとに、発話と共起するジェスチャーが談話中の指示対象の特定にどう作用しているかを検討する。学習者と母語話者が談話中に使用するジェスチャーには量的および質的な違いが見られ、(1)学習者は母語話者に比べ、発話と共起するジェスチャーをより頻繁に使用すること、(2)学習者の談話に最も典型的で中心的な機能を果たしているのは、一般に考えられているような発話の意味内容を具体的に示すジェスチャーではなく、談話管理機能を付与されたより抽象的なジェスチャーであり、このジェスチャーは指示の剰余性を高めることで談話中の人物の特定をより正確にする役割を担っていること、の二点を考察する。さらに、学習者のジェスチャーは、競合する被指示対象間の区別を容易にするために、異なったタイプのものがシステマティックに交替で使用されている可能性を検証する。

〔キーワード〕ジェスチャー、談話、指示、第二言語、機能

1. はじめに

外国語の学習者が談話中に名詞句、代名詞、あるいはゼロ代名詞などの指示表現をどう使い分け、ストーリー中の人物や事物を特定するのかについては、第二言語研究において主に言語機能主義の立場から多くの研究がなされてきた（Yanagimachi 1997の概覧を参照）。しかしこの問題を扱うに際し、発話データだけでなく発話と共起するジェスチャーも分析の対象とした研究はまだほとんど報告されていない。人間のコミュニケーションに非言語的要素が如何に深く関与しているかを示す研究を引用するまでもなく、談話中で指示される対象の特定にジェスチャーの有無が深く作用しているであろうことは想像に難くない。発話者の意図した指示対象がどれ

だけ効果的に聞き手によって特定されひいては談話全体の理解につながったかを調べるには、従来の研究のように発話データだけを分析していたのでは不十分と言える。本稿では話者の意図の伝達は発話とジェスチャーの両チャンネルが一体として機能して初めて円滑に行われるという前提に立ち、従来あまり顧みられることのなかったジェスチャーによる談話中の人物指示の考察を試みる。

2. 学習者のジェスチャー使用に関する先行研究

談話中に現れるジェスチャーに関しては、母語話者のデータを対象にした研究でかなりの数が報告されている。心理学の分野では、例えばMcNeill（1992）がジェスチャーの多くは発話と共起し言語と表裏一体の伝達チャンネルを形成していることを示し、会話分析の例では、Schegloff（1984）、Goodwin（1986）、Streek（1993）のように人間の対話の一瞬一瞬の展開にジェスチャー（あるいは、視線、姿勢などの非言語要素）が深く関与していることを実証したものがある。しかしながら、第二言語話者のジェスチャーを対象とした研究はまだ少なく、例外的にコミュニケーションストラテジー（CS）に関して、学習者のジェスチャー使用を発話中の適切な語彙の検索や使用に伴う困難を表示するマイム（mime）、つまり発話チャンネルでうまく対処できない時に仕方なくジェスチャーという代替手段に頼るCSとして分類した研究が報告されている程度である（例えば、Dörnyei and Scott 1997を参照）。

しかし最近になって、Gullberg（1996, 1998）が心理学におけるジェスチャー研究（McNeill 1992）と第二言語におけるCSの研究を融合させ、フランス語とスウェーデン語学習者の談話データをもとに、発話と共起するジェスチャーの使用に関する報告をしている。Gullbergは、フランス語とスウェーデン語の中級レベルの学習者は談話中の人物事物を指示する場合、母語話者であれば代名詞形を使用する環境においてより明示的な名詞句形を使用するだけでなく、deicticジェスチャー（後述のジェスチャー分類の項を参照のこと）も同時に使用した余剰とも言える指示形式の事例が頻繁にあったことを報告している。この結果は、L2話者の談話中では指示表現の余剰性が高くなる傾向があるという一部の先行研究の報告を裏付ける結果となっている。Gullbergによれば、発話中の指示表現と共にdeicticジェスチャーが使用された結果、指示される対象を聞き手が特定

する際の曖昧さが減少され学習者の談話の一貫性（coherence）と明確さが増す効果が出たと言う。Gullbergはまた、母語話者と学習者のジェスチャー使用の差異は、学習者の方が母語話者に比べジェスチャーをより頻繁に使うという単に量的なものであり、質的には異なることはないと結論している。しかしながら、以上の結論については、Gullbergのデータがフランス語を母語とするスウェーデン語学習者とスウェーデン語を母語とするフランス語学習者から収集されており、Ｌ１もＬ２も西欧語の場合の結果であったことに留意すべきである。Yule and Tarone（1990, 1997）も主張するように、学習者の母語や社会文化的背景の違いがCSの使用に影響を及ぼすことは十分考えられ、異種間の言語データによってさらに検証されていかなければならない問題といえる。

3. 研究の目的

本稿では、英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の談話データをもとに上述のGullberg（1996, 1998）の報告を検証するとともに、次の三点について分析考察を行う。

(a) 日本語学習者が談話中で使用するジェスチャー、特に発話と共起するジェスチャーの種類、頻度の分布はどうなっているのか。

(b) 日本語学習者が使用するジェスチャーはどんな談話機能を担っているのか。

(c) 上の(a)、(b)について、日本語学習者の使用するジェスチャーは母語話者のそれと比較してどのような違いがあるのか。

4. データの収集

(a) データ

英語を母語とする日本語学習者12名（以下学習者グループとする）と、日本語母語話者９名（以下母語話者グループ）の各グループから談話データを収集した。学習者グループは日本での夏期集中語学プログラムに参加中の者と来日一年未満の短期留学生から成っており、全員英語圏の大学に在籍中の学部生と大学院生である。日本語レベルは初級後半から中級前半で、平均で2.4年の教室での学習経験と0.4年の滞日経験がある。母語話者グループは６名の大学生、２名の団体職員、１名の高校教師で構成されている。表１に各グループのプロフィールを示す。

表1：学習者グループと母語話者グループ

	学習者	母語話者
総数	12	9
男性/女性	8/4	3/6
平均年令	24.3	23.1
本国における日本語の平均学習年数	2.4	—
平均滞日年数	0.4	—
平均海外滞在年数	—	0.2

(b) データ収集の方法

まず学習者、母語話者両グループの各参加者がデータ収集の行われる部屋に入ると、調査者は参加承諾書に関する説明を行った後、年令、外国語学習歴、海外滞在経験などの基本的な情報を得るための数分間のインタビューを日本語で行った。学習者グループの場合はさらに、過去に在籍した日本語プログラムの名称や使用した日本語教科書・教材などの情報も収集した。ここまでは各参加者にその場の環境に慣れリラックスしてもらう時間を与えると同時に、調査者が学習者の日本語レベルの見極めを行う時間となった。最初に二つのタスクをウォームアップ用として行った後、三番めのタスクで本研究のデータを収集した。まず調査者が2分間のアニメーションビデオ[1)]を音なしで参加者に見せた後、その内容をできるだけ詳しく話してもらった。学習者グループについてはこのタスクを英語でも行ってもらい、英語母語話者の談話資料も収集したが、本研究では分析の対象となっていない。学習者、母語話者両グループの会話の相手役となった日本人には20代から30代の参加者と面識のない日本語母語話者計8名があたった。インフォメーション・ギャップを生じさせより自然な対話に近付けるため、彼らにはタスクに使用されたアニメーションビデオの内容については全く知らされていない。録画は三脚上に設置されたソニーのアナログ式8ミリビデオカメラで行い、音声は参加者から約30～50cmの所に置かれた外部マイクを通して採集した。データの収集中の器材の操作は調査者がリモートコントロールで行った。

(c) ジェスチャーの分類

データ中の発話と共起したジェスチャーは先行研究の Gullberg（1996,

1998）同様、McNeill（1992）にある四つのタイプに基づいて分類した。以下に各タイプのジェスチャーについて、データ中の学習者の談話に出現した事例を示しながら簡単に説明する。

(i) iconic ジェスチャー：これは具体的な事物や出来事を絵のように表すジェスチャーで、図1では、ビデオ中の男性が事務所で書類を作成している光景を描写する時に、両手でタイプライターを使う様子がiconic ジェスチャーで示されている（下線部はジェスチャーが起きた個所を示す）。

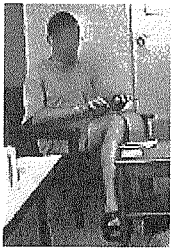


図1：iconic ジェスチャーの例

JFL-01：あのう、そして、あの、レポートを、ん、書いたり、
iconic
⇩
[両手でキーボードをたたく様子]

(ii) metaphoric ジェスチャー：これは iconic と同様、絵画的あるいは図形的なジェスチャーであるが、指示される内容は抽象的な事柄・概念となる。例えば、下の図2に示した例では、「むかっと」という犬の感情が両手で何かを包むようなジェスチャーになって表されている。

図2：metaphoric ジェスチャーの例

JFL-02：えー、犬は、んーー、むかっとになります
metaphoric
⇩
[両手で何かを包むようなジェスチャー]

(iii) deictic ジェスチャー：下の例では話者は左手の人さし指を立て体の正面から左前方に弧を描くように振ることによって、彼のジェスチャー空間で談話中の隣家がある方向を示している。また、このタイプのジェスチャーは位置関係だけでなく事物を指し示す場合にも使われ、談話標識の役目を果たす。

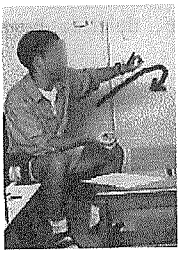


図3：deictic ジェスチャーの例

JFL-03：となりの、あのう、いえ、いえ、の、あの、
deictic　　ドアの前に、
⇩
[左手の人さし指を立て、体の正面から左前方へ振る]

(iv) beat ジェスチャー：これは手や指を上下に振るジェスチャーで、動きは単純だが、deictic 同様重要な談話標識となると考えられている。図4の例では「年寄りの」と「男性は」のところで右手が上下に往復する beat のジェスチャーが見られた。新しい登場人物を導入する時に beat が使われた例で、他にも beat は発話を強調したい時などに使われる。

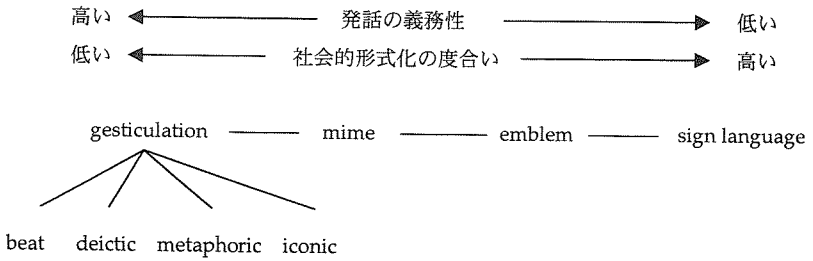
図4：beat ジェスチャーの例

JFL-02：んとー、年寄りの、えーー、男性は、ええ、...
beat　　beat
⇩　　⇩
[ともに、右手を体の正面で上下させる動き]

実は、これら四つのジェスチャーの他にも、一般にジェスチャーと呼ばれているものに mime がある。これは絵画的な性格をもつ点で上記の iconic や metaphoric のジェスチャーに似ているが、両者に比べ発話への依存性が低く、発話と同時に出現する割合も少なくなり、話し手の mime を使おうとする意図も上記の四つのジェスチャーに比べると強くなる。さらに、emblem は mime と比べるともっと形式化されたもので、各文化の中である程度固定化されたジェスチャーである。例えば日本語の「ごまをする」しぐさなどがその例にあたる。さらに sign language（手話）があるが、これは完全に発話にとってかわることのできる非言語コミュニケーションである。以上の分類をまとめたものが図5で（McNeill 1992：37）、図の線上を左から右に行くほど発話の義務性が弱まると同時に、社会的に形式

化された度合いが高まると考えられる。本研究ではこれらのジェスチャーのうち、特に発話と共起するタイプの iconic、metaphoric、deictic、beat の四つのジェスチャーを分析の対象とする。

図5：ジェスチャーの分類（McNeill 1992）



5. 結果

表2と表3に母語話者（JPN）、学習者（JFL）両グループの発話に共起したジェスチャーの出現頻度を話者別に示す。全体として学習者グループの方が母語話者グループより頻繁にジェスチャーを使用しており、節あたりのジェスチャー出現数を見ると、学習者の1.90回に対し母語話者の場合は0.59回で、前者の談話の方が母語話者のそれに比べ約3倍の頻度でジェスチャーを含んでいる。なお、Gullberg（1996）では学習者と母語話者の節あたりジェスチャー出現数がそれぞれ平均1.67回と0.71回[2)]と報告されていて、Ｌ１とＬ２の言語やタスクの違いにもかかわらず今回の結果と近い数値となっている。母語話者グループでは一人の話者（JPN-09）が一回もジェスチャーを使用せず、他にも二名（JPN-07とJPN-08）がそれぞれ3回と9回ずつ小さな手の動きを交えたジェスチャーを使用したにとどまった。母語話者の場合はジェスチャーを比較的多用した話者（JPN-01とJPN-06）でも節あたり1.00回どまりであったが、学習者の場合は一人（JFL-07）を除いて全員それ以上の頻度でジェスチャーを使用している。

表2：母語話者の談話中のジェスチャーのタイプと頻度

	Iconic	Meta-phoric	Deictic	Beat	合　計	ストーリーの節総数	節あたりジェスチャー数
JPN-01	37	7	24	1	69	69	1.00
JPN-02	11	6	4	0	21	26	0.81
JPN-03	17	2	7	6	32	47	0.68
JPN-04	6	3	7	0	16	30	0.53
JPN-05	16	0	3	2	21	33	0.64
JPN-06	37	3	8	4	52	52	1.00
JPN-07	2	0	0	1	3	26	0.12
JPN-08	4	0	4	1	9	42	0.21
JPN-09	0	0	0	0	0	52	0.00
合　計	130	21	57	15	223	377	0.59
	58.3%	9.4%	25.6%	6.7%	100%	41.9 (平均)	

表3：学習者の談話中のジェスチャーのタイプと頻度

	Iconic	Meta-phoric	Deictic	Beat	合　計	ストーリーの節総数	節あたりジェスチャー数
JFL-01	2	0	21	35	58	27	2.15
JFL-02	46	17	31	79	173	55	3.15
JFL-03	40	11	29	15	95	48	1.98
JFL-04	31	4	9	16	60	31	1.94
JFL-05	24	1	10	6	41	29	1.41
JFL-06	12	5	18	20	55	24	2.29
JFL-07	8	5	6	2	21	24	0.88
JFL-08	18	2	4	2	26	20	1.30
JFL-09	17	5	6	22	50	38	1.32
JFL-10	19	6	18	24	67	36	1.86
JFL-11	12	0	14	17	43	29	1.48
JFL-12	38	4	25	33	100	54	1.85
合　計	267	60	191	271	789	416	1.90
	33.8%	7.6%	24.2%	34.3%	100%	34.7 (平均)	

次に、使用されたジェスチャーのタイプで見ると、母語話者のデータで他のタイプと比較して圧倒的な頻度で出現したのはiconicで、全体の半分以上の58.3%を占めていた。このタイプのジェスチャーは図6の例にもあるように、主に出来事や人物事物の形相や様態を鮮明に描写するのに使われていたのが特徴である。

図6：母語話者によるiconicジェスチャーの例

JPN-03：ケースの、上に、赤ん坊を急遽置いて、
iconic
⇩
[両手の人さし指を立て、キャビネットの輪郭を示す]

さらに母語話者のジェスチャー使用で特徴的だったのは、下の図7と図8にあるように、metaphoricジェスチャーが「いらいら」「必死に」など登場人物の心理状態を描写する言語表現と共起する傾向が見られた点である。

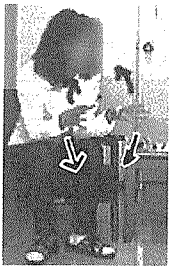


図7：母語話者によるmetaphoricジェスチャーの例

JPN-01：（男の人は）すごいいらいらして、います。
metaphoric
⇩
[手のひらを体の正面で向い合わせ逆方向に上下させる]

図8：母語話者によるmetaphoricジェスチャーの例

JPN-03：その、いらだっていた男性は、この仕事が忙しい中で、 metaphoric
⇩
[右手で何かをつかむようなしぐさ]

次に学習者の使用したジェスチャーであるが、表3からわかるように彼らの談話は母語話者が多用したiconicだけでなく、多くのbeatとdeicticのジェスチャーを含んでいた。新たな登場人物をストーリー中に導入したり、人物や事物の位置関係を明らかにしたりするbeatとdeicticのジェスチャーは、学習者の全ジェスチャーの合わせて58.5%を占めていた。下の図9に赤ちゃんがストーリーに初めて導入された際に使用されたbeatのジェスチャーの、図10に赤ちゃんが置かれていたドアの位置を示すdeicticジェスチャーの例をそれぞれ示す。

図9：学習者によるbeatジェスチャーの使用例

JFL-09：赤ちゃんが、玄関のとこに、すわっていた
beat　beat　beat
⇩　⇩　⇩
[三つとも左手を体の正面で上から下へ振る動き（右手は静止位置にある）]

図10：学習者によるdeicticジェスチャーの使用例

JFL-10：ドアに、見に、行ったん、です、から、
deictic
⇩
[右手の人さし指を立て、体の正面から左へ振る]

学習者が使用したこれらのジェスチャーは、ストーリー中の人物への指示や位置関係を明示するために繰り返し出現し、共起した言語形式とともに、しばしば指示の余剰性を伴いながら使用されていた。この点は同様の環境でジェスチャーの出現がそれほど頻繁に起きなかった母語話者グループの場合と対照的である。特に、beatのジェスチャーは学習者グループで最も頻繁に出現したタイプであったが、母語話者グループではこのタイプのジェスチャーは最も頻度が低かったことにも注目すべきである。

以上のような両グループのジェスチャー使用の差は、下の表4と表5でもわかるように、ビデオ中の四組の人物（中年男性、赤ちゃん、老夫婦、

犬）が談話中に初めて導入された際に使用されたジェスチャーにも現れている。言語的にはすべて明示的な指示表現（名詞句）が使用された場面であるが、各表はそれらの表現と共起したジェスチャーの有無とタイプを示している。

表４：登場人物の導入時に出現したジェスチャー（母語話者）

	男　性	赤ちゃん	老夫婦	犬
JPN-01	Beat	Iconic	Deictic	Deictic
JPN-02	Iconic	Iconic	-	-
JPN-03	-	-	-	-
JPN-04	-	-	-	-
JPN-05	-	-	Deictic	Iconic
JPN-06	-	Deictic	-	Iconic
JPN-07	-	-	-	-
JPN-08	-	-	-	-
JPN-09	-	-	-	-

36例中10例（28%）でジェスチャーが共起

表５：登場人物の導入時に出現したジェスチャー（学習者）

	男	赤ちゃん	老夫婦	犬
JFL-01	Beat	Deictic	Deictic	Iconic
JFL-02	Beat	Iconic	Deictic	Iconic
JFL-03	-	Iconic	Deictic	Deictic
JFL-04	Deictic	Iconic	Deictic	Deictic
JFL-05	-	Iconic	Deictic	Iconic
JFL-06	Deictic	Deictic	Deictic	Beat
JFL-07	-	-	Deictic	Iconic
JFL-08	Iconic	Iconic	-	-
JFL-09	Beat	Beat	-	Iconic
JFL-10	Iconic	Deictic	Deictic	Deictic
JFL-11	Deictic	Beat	Deictic	Beat
JFL-12	Deictic	Deictic	Deictic	Deictic

48例中41例（85%）でジェスチャーが共起

表4を見ると、母語話者グループでは各人物の初出は36例中10例（28%）でしかジェスチャーと共起しておらず、グループ内の話者の半数以上にあたる5名はこの談話構成上大変重要だと思われる環境で全くジェスチャーを使用していない。対照的に学習者グループの場合は、12名全員がこの環境で何らかのジェスチャーを使用し、過半数の7名については4組の登場人物すべての導入でジェスチャーが共起している。割合としては、全体の48例中41例（85%）でジェスチャーが出現しており、これら41例の70%以上（41例中29例）はdeictic と beat のジェスチャーであったことは学習者グループのジェスチャー使用の特徴をよく表している。学習者は新たな登場人物を言語的に明示的な形式で表示したばかりでなく、同様の目的を談話マーカーとしてのジェスチャーでも果たそうとしていたことがここから読み取れるのである。

6. 考察

上の表2から表5によって、まず日本語母語話者と学習者のジェスチャー使用には量的な差異があったことが明らかになった。Gullberg（1996）の報告同様、学習者の談話は母語話者のものに比べ発話にジェスチャーが共起する頻度が高い結果が観察されたのだが、一方で、本研究では母語話者と学習者の間にジェスチャー使用の質的な差異もあることが示唆された。母語話者の場合は、発話と共起する四つのジェスチャーのタイプの中ではmimeに最も近く具体的で絵画的なpictorialジェスチャーが過半数を占めており、ストーリーを効果的に劇的に聞き手に伝えることに重点が置かれていた様子がうかがわれた、また出現頻度は低かったがiconic同様絵画的な性格をもつmetaphoricジェスチャーも、効果的なストーリーを構築する目的で使用されていることが母語話者グループの特徴であった。しかし、日本語能力が未だ発達途上の学習者には、今回のタスクで要求されたような複数の段落からなる物語を構築することは困難で、母語話者のように聞き手を引き込むストーリーの描写や展開に専念するまでの余裕はなかったであろうことは想像に難くない。彼らにとっては、たとえ発話とジェスチャーの同時発生によって指示の余剰性が増して堅苦しい感じのストーリーになろうとも、もっぱら人物関係が明確でわかり易い談話を構築することが先決問題であったと考えられる。そのため談話管理上重要な機能を付与されたbeatとdeicticのジェスチャーが彼らの物語に全体の過半数

の頻度で出現したのは自然の流れであったと言える。

上述の議論は以下に示すように、複数の学習者が各種ジェスチャーのシステマティックな使い分けによって、競合する指示対象間の特定を容易にしようとしていたことにも裏づけられる。下の例は、ビデオ中の中年男性が玄関先で赤ちゃんを見つけ家の中に抱え入れるが、結局隣家に連れていくことにするまでの場面を一人の学習者（JFL-02）が再現したもので、図11と図12はその時に男性と赤ちゃんへの指示でどのようなジェスチャーが使い分けられていたかを例示している。

(2.1)	はじめに、年寄りの①、男性②は、机で、仕事をして、	① Beat （右手） ② Beat （右手）
(2.2)	タイプライターをつくって（つかって）、	
	.....	
(2.5)	その人③は、cigar があって、	③ Deictic （左手、かすか）
	.....	
(2.8)	ドアのそば、で何か、気いつけて、	
	.....	
(2.10)	ドアをあけて、	
(2.11)	ドアのうしろで、赤ちゃん④、います、	④ Iconic （両手）
(2.12)	その人⑤、あかちゃん⑥、を、持って行って、	⑤ Deictic （右手） ⑥ Iconic （両手）
(2.13)	しょるいを入れる、ものの上、に、赤ちゃん⑦を、赤ちゃん⑧、に、と、あそびました、	⑦ Iconic （両手） ⑧ Iconic （両手）
(2.14)	電気の、シェードを、赤ちゃんのあたま⑨に、おいて、	⑨ Iconic （両手）
	.....	
(2.21)	その時、男性⑩、と、赤ちゃーん⑪、男性は⑫、赤ちゃん⑬といっしょに、うちー、へ出かけて（を出て）、	⑩ Deictic （左手） ⑪ Iconic （両手）
(2.22)	となりの、うちへ行って、	⑫ Deictic （左手） ⑬ Iconic （両手）

図11：男性への指示に使用されたジェスチャー例（2.5）

JFL-02：その人③は、cigar があって、
deictic
⇩
[左手によるかすかな deictic ジェスチャー]

図12：赤ちゃんへの指示に使用されたジェスチャーの例（2.21）

JFL-02：男性は、赤ちゃん⑬といっしょに、うちー、
⇩　へ出かけて（を出て）
[両手による明確な iconic ジェスチャー]

この場面で、(2.1) で導入され中心人物となった中年男性への指示は、一貫して図11のような片手だけの抽象的で時にはかすかな deictic か beat のジェスチャーで行われているのに対して、あとから導入された赤ちゃんには両手を使ったより具体的で明確な iconic ジェスチャーが使用されている。ここでは指示される対象によって二つのタイプのジェスチャーが明確に使い分けられていることがわかるが、この交替は新たな登場人物のように主題継続性の低い被指示対象にはより明示的な指示表現で、逆に主題継続性の高い対象には非明示的な指示表現でマークするという指示ストラテジーの基本的ルール（例えば Givón 1984）にかなったものになっている。

しかし、この例で赤ちゃんが両手による iconic ジェスチャーと共起したのは、その談話上の役割によるのではなく、男性と赤ちゃんの格関係、つまり動作主としての男性が被動作主である赤ちゃんを抱きかかえたことを表しているからではないかという議論も予想される。ところが、この直後の赤ちゃんが男性によって隣家の玄関先に置き去りにされ、その家の老夫婦によって室内に入れられる場面では、赤ちゃんはあまり目立たないジェスチャーによって指示され始めるのに対し、新たに登場した老夫婦と犬はより大きく明確なジェスチャーでマークされるのである。

(2.23) そのうちでは、年より人①、が二人②います。
(2.24) それから、黒い、犬③が、いて、
(2.25) その二人④は、犬⑤といっしょに、遊んで、
(2.26) それでも、ドアを、気がつけて、
(2.27) 開けて、
(2.28) ドアのうしろ、、に、赤ちゃん⑥います、
(2.29) だから、赤ちゃん⑦といっしょに、遊び始めました。
(2.30) 赤ちゃん⑧といっしょに、遊んだから、
(2.31) 犬⑨は、ちょっとー、寂しくなりましたね、

① Beat (左手)
② Beat (左手)
③ Iconic (両手)
④ Iconic (両手)
⑤ Iconic (両手、beatの動きも伴う)
⑥ Deictic (左手)
⑦ Beat (左手)
⑧ Beat (左手、かすか)
⑨ Iconic (両手)

図13：老夫婦への指示に使用されたジェスチャーの例

JFL-02(2.25)：その二人④は、犬といっしょに、遊んで、
iconic
⇩
[両手による大きなiconicジェスチャー]

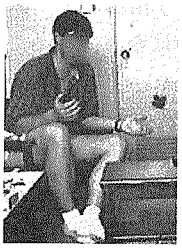


図14：赤ちゃんへの指示に使用されたジェスチャーの例

JFL-02(2.28)：ドアのうしろ、、に、赤ちゃん⑥います、
deictic
⇩
[左手だけのdeicticジェスチャー（右手は静止位置）]

冒頭（2.23）の老夫婦への言及が左手のbeatと共起した以外は、新たに登場した夫婦と犬への言及は繰り返し両手によるiconic、つまり赤ちゃんへの指示に使用されていたジェスチャーによって強化されている。一方、

旧情報となった赤ちゃんはと言えば、この場面でも前段の中年男性のように老夫婦によって両手で抱きかかえられながらあやされるのだが、iconicジェスチャーではなく、左手のみによるdeictic かbeatのジェスチャーによって指示されている（2.28から2.30）。このようにこの段落においても前段落同様、異なった種類のジェスチャーが指示ストラテジーの原則にしたがって使い分けられている様子がわかる。

さらにこの次の場面で、犬が夫婦の注意を自分に取り戻そうとして失敗する個所では、主題となった犬への指示表現は片手のdeictic ジェスチャーが共起し、夫婦と赤ちゃんには共に両手によるiconic ジェスチャーが上下の動きを伴って共起している。ここでも中心人物の交替と共に各人物と共起するジェスチャーのタイプが入れ替わっているのである。

(2.42) 年寄りの二人①、年寄りのひ②、	① Iconic （両手、上下動付き）
年寄りのひと③…	② Iconic （両手、上下動付き）
そのとき、そのことをしながら、	③ Iconic （両手、上下動付き）
(2.43) 年寄りの人④、まだ、赤ちゃん⑤	④ Iconic （両手、上下動付き）
といっしょに遊んだから、	⑤ Iconic （両手、上下動付き）
(2.44) 犬⑥は、むかっとになります、(咳)	⑥ Deictic （左手）

この学習者（JFL-02）は学習者グループの中でも発話能力が低い部類に属するが、にも拘わらず彼の談話には異なったタイプのジェスチャーが指示される対象によってかなり規則的に使い分けられ、競合する指示対象を対比させている様子が観察された。このようなジェスチャーの規則的シフトはJFL-02の談話と類似したトピック交替のパターンが起きた他の二名の学習者（JFL-03とJFL-11）の談話にも観察されている。対照的に、母語話者の場合は学習者ほどジェスチャーによる指示対象の追跡に注意を払う傾向は観察されず、表2から表5で明らかになったように談話管理機能が付与されていると考えられるジェスチャーの出現も学習者の場合より少なかったのである。

以上の結果と考察は、従来のCSの研究報告を含め一般に信じられているような学習のジェスチャー使用のイメージは、実際とは少なからぬズレがあることを示唆している。本研究のような初級後半から中級前半のレベルにある学習者であっても、単語や文レベルでの語彙検索や文法に関わる

困難に直面した時だけにジェスチャーを使用するわけではなく、談話管理上の狙いが意図的に盛り込まれた一種の伝達デバイスとしてのジェスチャーをかなり使用している可能性があると考えられる。学習者のジェスチャーが一般にコミュニケーションが一時的に行き詰まった事態を回避する方略としか見なされてこなかった理由の一つには、従来学習者のジェスチャー使用が論じられる時はmime（あるいはemblem）に類別されるジェスチャーが主に扱われ、発話と共起するタイプにあまり注意が向けられなかったことが考えられる。本稿で分析の対象となっている四つのタイプのジェスチャーと違い、mimeは発話とは独立して出現するため目立ちやすく、その分聞き手やデータ分析者の注目度も高くなる。また本研究のデータでもmimeは母語話者の6回に対して学習者の場合は23回の使用例があり、学習者がmimeによって伝達上の問題を回避解決していると思われる場面は確かに少なくない。しかし、ジェスチャー研究の対象を発話と共起するタイプにまで拡大しその使用を詳しく分析してみると、具体的で絵画的なジェスチャーは母語話者の方が頻繁に使用していた一方で、学習者は抽象的で地味な注目度は低いが談話構成上重要なジェスチャーを多用していたことは今回の調査で判明した通りである。発話と共起するジェスチャーは発話情報の影に隠れがちだが、学習者の構築する談話が適確に聞き手に伝達されるかを左右する極めて重要な情報を提供しているのである。

7. 結論

フランス語とスウェーデン語のそれぞれの母語話者と学習者の談話を比較したGullberg（1996, 1998）の研究では使用されたジェスチャーに量的な違いのみが見られ、質的には違いがなかったことが報告されていたが、本研究では英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者が使用するジェスチャーには量的だけでなく質的な違いがあることが示唆された。このような両研究の結果の差異に影響を与えた要因として、西欧語と日本語のコミュニケーションスタイルにおける社会文化的相違[3)]や学習者のＬ２レベルの違い（Gullbergの学習者のレベルの方が高かったために母語話者との質的な差異が少なくなっていた可能性）などが考えられるが、これらの疑問点については本研究のデータでは憶測の域を出ず、今後の研究結果を待つしかない。今回使用したデータとは別に、学習者が母語である英語で同様のストーリーを語ったデータも収集されているので、今後それを分析

することにより、英語におけるコミュニケーションのスタイルが学習者のＬ２談話中のジェスチャー使用に与えた影響についての言及も可能になるかもしれない。

最後に、今回の結果を外国語教育における会話テストとの関連で考察してみたい。もし発話とジェスチャーが補完し合って話者の情報伝達を支えているのが事実だとすると、学習者が母語話者と行った会話を評価する場合、その評価が、(1)その場で行われるのか、(2)録画されたものを見ながら行われるのか、(3)録音された音声だけを参考に行われるのか、によって評価結果が異なってくることが予想される。つまり非言語情報の質と量が(1)から(3)と次第に低くなるにつれ、最終的な評価もこの順序で低くなる可能性がある。例えば会話能力テストの一種であるOPIの会話能力評価でも、会話テストの現場に立ち会い(1)と(3)の両方のデータのうち主に(1)での資料をもとに学習者のレベル評価を行う者と、評価者の養成にあたっているトレーナーのように(3)の音声データだけで評価する者との間で学習者のレベル判断に差が出ることがよくある。しかし、それが判定者間の判断基準の相違によるのではなく、両者の判定の根拠になった資料に含まれる非言語情報の量が異なることに起因している可能性も十分考えられるのである。今後、ジェスチャーに限らず非言語要素全般が学習者の会話能力評価に与える影響についてもさらなる調査が必要であると思われる。

注：

1）このアニメーションビデオはカナダで製作された『Every Child』という線画アニメで、ストーリー展開の明確さ、おもしろさ、理解する際に文化的知識の有無があまり問われないこと、登場人物の数の適当さ（４組）などの基準からこのビデオを資料収集用に選んだ。前編で約８分のアニメだが、今回の研究では、一番目のエピソードが完結するビデオの冒頭の２分間だけを使い、音声は消した状態で参加者に見せている。その２分間のあらすじは次の通り。

中年の男性が事務所の中で忙しいそうに仕事をしている。玄関のドアの所で物音がしたので行って開けてみると、赤ちゃんが一人でいるのを見つける。男は赤ちゃんを抱き入れ、部屋のファイルキャビネットの上に置いてあやした後、仕事にもどる。しかし赤ちゃんが騒いで仕事がはかどらないので、その赤ちゃんを連れて隣りの老夫婦の家に

行き、玄関の所に赤ちゃんを置いて去ってしまう。老夫婦は赤ちゃんを引き取り可愛がり始めるが、今度は今まで老夫婦の愛情を一身に受けていた夫婦の犬が嫉妬する。犬は家事をしたりして夫婦の注意を取り戻そうと必死になるが、それも無駄だとわかると家を出ていく。犬がいなくなったことに気がついた夫婦は、玄関先で死んだふりをしている犬を見つけ、抱きかかえて謝る。その後夫婦は赤ちゃん、犬と共に仲良く暮らすようになる。

2）Gullberg（1996）の表1中の6名の平均値をとった。

3）本研究の日本語母語話者のジェスチャー使用で文化的な違いが関与している可能性のある結果として、(1)表2で出現頻度が節あたり0.59回となっており、西欧言語での平均だと推測される節あたり1回（McNeill 1992）という値と比較するとかなり少ない点、さらに(2) McNeill (1992) と Gullberg (1996) の母語話者のデータと比較しても、指や手を上下させる beat のジェスチャー（時に人さし指を立てた状態で使われる）の占める割合がかなり少ない点、の二点が挙げられる。

参考文献

Dörnyei, Z. and Scott, M. L. (1997). Communication strategies in a second language: Definitions and taxonomies. *Language Learning,* 47, 173-210.

Givón, T. (1984). Universals of discourse structure and second language acquisition. In Rutherford, W. (ed) *Language universals and second language acquisition.* (pp. 109-136). Amsterdam: John Benjamins.

Goodwin, C. (1986). Gesture as a resource for the organization of mutual orientation. *Semiotica,* 62, 29-49.

Gullberg, M. (1996). Deictic gesture and strategy in second language narrative. In Messing, L. S. (ed.) *Proceedings of the workshop on the integration of gesture in language and speech* (pp. 155-164). Newark and Wilmington, DA: Applied Science and Engineering Laboratories, University of Delaware.

Gullberg, M. (1998). *Gesture as a communication strategy in second language discourse: A study of learners of French and Swedish.* Lund, Sweden: Lund University Press.

McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought.*

Chicago : University of Chicago Press.

Schegloff, E. A. (1984). On some gestures' relation to talk. In Atkinson, J. M. & Heritage, J. (eds.) *Structures of social action* (pp. 266-296). Cambridge : Cambridge University Press.

Streek, J. (1993). Gesture as communication I : Its coordination with gaze and speech. *Communication Monographs,* 60, 275-299.

Yanagimachi, T. (1997). *The acquisition of referential form use in L2 oral narrative discourse by adult English-speaking learners of Japanese.* Ph. D. dissertation. University of Minnesota.

Yule, G. and Tarone, E. (1990). Eliciting the performance of strategic competence. In Scarcella, R., Andersen, E., and Krashen, S. (eds.) *Developing communicative competence in a second language.* (pp. 179-194). New York : Newbury House.

Yule, G. and Tarone, E. (1997). Investing communication strategies in L2 reference : pros and cons. In Kasper, G. and Kellerman, E. (eds.) *Communication strategies : Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives.* (pp. 17-30). New York: Longman.

Journal of the International Student Center Hokkaido University No. 3 (1999)

Gesture in L2 narrative: How do learners of Japanese identify story participants with co-verbal gestures?

YANAGIMACHI, Tomoharu

In the past, gesture has not been considered a significant aspect of learner language by second-language researchers, the only exception being researchers of communication strategies who have examined gesture in terms of compensatory strategies. This paper investigates how JFL learners employ gestures simultaneously with speech to promote the comprehensibility of their oral narratives. Story-retelling data in Japanese were collected from 12 lower-proficiency level English-speaking learners of Japanese and 9 native speakers.

The results suggest that JFL learners and native speakers differ both quantitatively and qualitatively in their use of coverbal gestures during discourse production, achieving different communicative purposes. Overall, learners employ gestures more frequently than their native-speaking counterparts, and the most typical and prominent types of gestures during learner production are abstract beat and deictic gestures which make the identification of story characters in their narratives easier by increasing referential redundancy. In contrast, native speakers often use ostensive and pictorial iconic gestures in order to increase the dramatic effect of their stories. Learners' systematic use of different types of coverbal gestures for discourse-pragmatic management is also discussed.